

# 「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくり

## －調査結果を活用した提案授業と研究会の支援－

主 幹・指導主事	外川 陽清
主 幹・指導主事	中村 智司
主 査・指導主事	天野秀太朗
副主査・指導主事	小林 美佳
副主査・指導主事	西谷地力也
指導主事	三枝 朋佳

キーワード 全国学力・学習状況調査分析結果の活用, 授業改善

### 研究の概要

研究協力校(山梨県総合教育センターが校内研究を支援・サポートする学校)における各種学力調査の活用等の支援の在り方に関する研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくりに寄与する。研究期間は2年間で基本とし、今年度はその2年目である。

中学校チームの研究主題と副主題は、次の通りである。

「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくり～調査結果を活用した提案授業と研究会の支援～

研究協力校の研究主題と副主題は、次の通りである。

#### ア 南アルプス市立白根御勅使中学校

自ら学び 互いに高めあう 心豊かな生徒の育成～主体的・対話的で深い学びによる思考力・判断力・表現力の向上をめざして～



図1 白根御勅使中学校

#### イ 笛吹市立一宮南小学校

自分の考えを持ち 表現できる子どもの育成～  
「かかわり」を大切にしたい学び合いを通して～



図2 一宮南小学校

#### I 主題設定の理由

本研究の主題を設定する際、まずは研究協力校の研究主題を念頭に置くことを第一とした。そのうえで、「主体的・対話的で深い学び」による思考力・判断力・表現力の向上を目指す視点から授業改善を行うために児童生徒の実態把握を行った。全国学力・学習状況調査(以下「全国学調」)の分析結果を通して課題を明確にした。これらを踏まえることで、授業者が自身の授業を見直し、授業改善につなげられると考えた。本年度は、校内研究会で実施した学習会やワークショップを通して、個々の教員が日常の授業実践において主体的に授業改善に取り組んでいくことを目標としている。

## II 研究の目的

各種学力調査の活用を協力校を含めた多くの学校において実践できるよう、学校の特徴を生かした実践に寄与するとともに、事例の蓄積を通して、本センターのシンクタンク機能の充実を図る。

## III 研究の方法

本研究の方法は以下のとおりである。

- ・各種調査の分析結果に基づき、研究授業で扱う単元を授業者と指導主事が話し合い、児童生徒の実態に沿った授業づくりを推進していく。
- ・学習会、指導案検討、研究授業、研究会等の講師を派遣する。
- ・先生方が自分自身の変容を自覚できるように、OPP シートを活用する。また、その記述とアンケートの結果を検証の手立てとする。

## IV 研究の経緯および結果と考察

### 1 研究の経緯

本年度の協力校への支援は以下のとおりである。本センター指導主事によるそれぞれの協力校への訪問人数は、白根御勅使中学校は延べ40人、一宮南小学校は延べ37人であった。

#### (1) 白根御勅使中学校への支援

4月9日(金)

- ・研究についての事前打合せ

4月12日(月)

- ・研究主題検討

5月10日(月)

- ・学習会「指導と評価の一体化について」

5月20日(木)

- ・自校採点講習会の打合せ

5月27日(木)

- ・全国学調(数学・国語)解答用紙回収

5月31日(月)

- ・自校採点講習会

7月9日(金)

- ・研究授業(国語)

8月4日(水)

- ・拡大校内研究会の打合せ(オンライン)

9月27日(月)

- ・全国学調結果説明、指導案検討(数学・理科)

10月18日(月)

- ・拡大校内研究会の運営について打合せ

10月22日(金)

- ・拡大校内研究会プレ授業参観(数学)

10月26日(火)

- ・拡大校内研究会(数学・理科)

10月29日(金)

- ・研究授業(体育)

11月15日(月)

- ・学習会「カリキュラム・マネジメント」

12月7日(火)

- ・学習会「特別支援教育」

1月11日(火)

- ・研究の振り返り

#### (2) 一宮南小学校への支援

4月12日(月)

- ・研究主題等検討

5月18日(火)

- ・研究計画検討

6月21日(月)

- ・自校採点講習会

7月5日(月)

- ・研究授業(国語)

7月26日(月)

- ・学習会「算数の授業づくり」

9月13日(月)

- ・指導案検討(算数)

10月6日(水)

- ・研究授業(算数)

10月25日(月)

- ・授業案検討(国語)

11月2日(火)

- ・拡大校内研究会の打ち合わせ

11月22日(月)

- ・拡大校内研究会(国語)

12月1日(水)

- ・学習会「全国学調の結果分析(国語)」  
山梨大学 齋藤知也教授を招聘

1月11日(火)

- ・学習会「全国学調の結果分析(算数)」  
山梨大学 清水宏幸教授による算数の学力調査の分析の報告

2月14日(月)

- ・研究の振り返り

### (3) 山梨大学との連携による支援

本センターは、山梨大学教育学部附属教育実践総合センターとの連携・教育研究を行っている。本研究の推進に際し、2名のアドバイザーから指導・助言を得るとともに、協力校への支援もいただいている。

本年度は、白根御勅使中学校の数学と理科の拡大校内研における研究授業において、示唆に富む貴重な指導・助言をいただくことができ、授業者だけでなく参加した教員にとっても大変有益な機会となった。

また、本県では、「山梨県教育委員会と山梨大学教育学部との連携協議会」を立ち上げている。この連携協議会内には、本県学力向上に際し学術的な知見を得ることを目的として「全国学力・学習状況調査及び山梨県学力把握調査データ分析作業部会 略称「データ分析WG(ワーキンググループ)」を設置している。今年度は、一宮南小学校の取組に関わって、以下のとおりWGを開催した。

5月24日(月)

- ・今年度のWG作業部会(図3)

8月27日(金)

- ・各種調査結果の報告  
(総合教育センター)



図3 部会の様子

9月14日(火)

- ・全国学調分析作業(算数・国語)

10月28日(木)

- ・WGによる全国学調分析結果報告(図4)

11月22日(月)

- ・拡大校内研究会

12月1日(水)

- ・一宮南小学校へ全国学調分析結果報告

12月16日(木)

- ・拡大校内研究会の報告

3月3日(木)

- ・本年度の取り組みと令和4年度の方向性

このデータ分析WGにおいても前述の連携・教育研究のアドバイザーと同様に、研究授業や学習会にも直接学校現場に出向いていただき、7名の大学の先生方から指導・助言をいただくことができた。

#### 3. 以上の結果の分析より見いだされた課題のまとめ

- (1) 問題文がしっかり読めていないこと
- (2) 算数の問題(数量や図形)を児童が固定的に捉えていること
- (3) 道のり・速さ・時間の関係、底辺と高さの関係、わり算の被除数と除数の関係などが捉えられていないこと

図4 報告書の一部

## 2 支援の具体

### (1) 調査結果の分析に基づく授業づくり

本センター指導主事が、全国学調(国語、算数及び数学)の結果分析に基づく提言を行い、授業者と協同で研究授業の単元を設定した。調査結果から明らかになった児童生徒の実態に沿った授業づくりを授業者と相談しながら推進し、その際も協力校の主体性を大切にされた。

#### ア 白根御勅使中学校の取り組み

今年度の白根御勅使中学校の校内研究会では、以下の研究支援を行った。

- ・指導と評価の一体化についての学習会
- ・自校採点講習会
- ・指導案検討会
- ・拡大校内研究会
- ・カリキュラム マネジメント学習会
- ・特別支援教育学習会

指導と評価の一体化についての学習会、自校採点講習会、指導案検討会を通して、各教科の枠をこえて生徒の状況を把握したり、連携を図って指導したりすることのよさを実感することができた。結果として、カリキュラム・マネジメント学習会や特別支援教育学習会の取り組みに対して学校全体で取り組む内容として捉えることができたようになった。

5月下旬に実施した自校採点講習会(図5)では、今年度行った全国学調の国語と数学をグループに分かれて採点した。採点は、解説資料を見ながら、生徒の解答を類型に分けることで、生徒がどのような間違いをしているのかを採点者が把握できるようにした。生徒の解答を類型に分けることは、国語や数学を担当する先生方は経験があっても全職員でこのような採点をしたのははじめてだった。実際に採点した後、感じたことを付箋を使ってそれぞれの考えを共有し、話し合うことで生徒の学習の成果や課題を実感することができた。これを

もとに、学校全体として授業改善に取り組む雰囲気が出た。採点後のグループ討議(図6)では、次のような意見があった。

- ・自分の考えをまとめて表現する力をすべての教科で行っていく。
- ・子どもの発想力を高めるために、課題解決的な学習を定期的に取り入れていくことが大切である。
- ・全体的に読み取りの力が弱い。



図5 講習会の様子



図6 ワークショップ

また、国語と数学以外の先生方のOPPシートの記述からも全職員で行った自校採点が生徒の実態把握と指導改善に役立っていることがわかる。

#### 国語・数学以外の先生方の記述

- ・本校生徒の表現力、思考力、判断力を更に伸ばすことが課題であると感じたので、理科の課題解決型の授業を生徒の実態に合わせて活動を行うことで生徒の力を伸ばしたい。(理科)
- ・生徒の理解力不足といった現状など、担当教科の活動では気づけなかった実態を知ったことで、日常生活の声かけや言葉の選び方にも気を配っていくことを意識したいと感じた。(保健体育)

次に、自校採点や調査結果を受け、拡大校内研の準備が進められた。白根御勅使中学校では、昨年度から拡大校内研究会の授業で生徒が根拠をもとに説明する活動に取り組んできた。8月上旬にオンラインで拡大校内研究会の授業者と打ち合わせを行い、全国学調の結果を分析する中で、今年度の拡大校内研究会では、数学と理科の2教科を授業公開することに決まった。白根御勅使中学校の職員全体には、9月の校内研究会(指導案検討)で、全国学調の結果についても併せて伝えた。

数学の課題としては、「データの活用」領域に課

題があり、理由の説明(記述)について指導の充実・授業改善が求められた。このことから、日常生活の事象を題材とした問題を取り上げ、統計的に問題解決する場面で、分布の特徴について話し合うことが考えられた。その上で、結論を述べるためにふさわしい根拠となるものを取り上げ、判断したこととその理由について説明する活動を取り入れることが重要であることの共通理解を図った。そこで、拡大校内研究会における研究授業では、中学校1年生「データの分析と活用」の単元において、授業を行うことにした。この単元は、本来3学期に行うものであるが、単元ごと2学期に移して研究授業を行った。本時の課題は、平成29年度の全国学調の問題を活用した。「『1日あたり1時間以上運動することが望ましい』ことを提案しよう」という課題で、日常生活の事象を題材とし、理由を説明する表現活動を取り入れ、「根拠と成り立つ事柄を示して理由を説明する力を高めていきたい」という願いを、本時のねらいとして位置づけて計画した。

理科については、過去の全国学調で、全国的に「電流と電圧の関係」と「電気抵抗」の問題に課題が見られたことや、自校採点から記述の問題に課題があるという生徒の実態から、2年生の「電流の世界」の単元で授業を行うことになった。単に実験を行い、結果から考えられることを考察するだけではなく、扱った実験で見られた科学現象を日常生活や社会の現象と結びつけて考えられるように授業を組み立てた。本単元の学習を通して、電流や電圧とは何か、それらのイメージをボトムアップ的に確立し、水流や滝の落差などのアナロジーを用いて、「自らの言葉で筋道を立てて説明できるような生徒の育成につなげたい」という願いを、本時のねらいとして位置づけて計画した。

#### イ 一宮南小学校の取り組み

今年度の一宮南小学校の校内研究では、以下の研究支援を行った。

- ・全国学調の結果分析
- ・学習会の実施、指導案検討
- ・研究授業、研究会の講師派遣
- ・データ分析WGによる支援

一宮南小学校でも白根御勅使中学校と同様に、自校採点講習会を行った。ここでは、本センター指導主事の指導のもと、解答類型に分けながら採点した。また、どの問題でどのようなつまづきが見られるのかや授業改善のアドバイスをを行ったことで、調査を実施していない学年の先生方が、児童の学習活動の課題に学校全体で取り組む必要性を感じることに繋がった(図7)。



図7 自校採点講習会

7月には国語の研究授業に向けての支援と算数の学習会を実施した(図8, 図9)。国語の研究授業では、これまで一宮南小学校では、「主張・根拠・理由の三角ロジック」について継続して研究してきた。職員の入れ替わりにかかわらず同様の指導ができるように、これまでの取り組みの有効性を再確認し、研究を深めた。今年度は算数の授業においても児童がより理解を深めるための指導について学習会が行われた。実施後の感想からは、「三角ロジックへの理解がさらに深まった」、「どのように算数の授業を作っていけばよいのかを具体的に学ぶことができた」など、具体的な実践に結びつく感想が多くあった。



図8 授業の様子



図9 学習会の様子

算数の研究授業の指導案検討においては、山梨大学の先生方からオンラインで指導助言をいただいた(図10)。一宮南小学校はセンター研究協力校であるとともにデータ分析WGの協力校でもある。このデータ分析WG協力校には、山梨大学の先生から分析結果の報告だけでなく、普段の学習指導においても支援していただけるので、より専門的

な視点も踏まえた指導助言をいただくことができた。



図10 算数の指導案検討(オンライン)

12月には、齋藤知也教授を招いての学習会を行った。一宮南小学校の結果分析からわかる授業改善の方策について以下の指導助言をいただいた。

#### 齋藤知也教授による全国学調国語の分析(一部)

一宮南小学校においては「主張・理由・根拠」の三角ロジックを重視した授業の成果が一定程度生まれている可能性がある。

今後は、「私は〇〇と考えます。なぜなら△△に注目すると□□だからです。」という文体だけではなく、文章や目的に応じて、さまざまな文体で書かせたり、文章や図表の情報を要約するようなかたちで根拠を示したりすることが望まれる。

#### (2) 拡大校内研究会

全国学調の結果を踏まえ、授業者と本センター指導主事が連絡を取り合い、協同で指導案を作成した。拡大校内研究会当日は、山梨大学のアドバイザーを招聘し、研究会において指導・助言をいただいた。

#### ア 白根御勅使中学校 拡大校内研究会

##### (数学・理科)

近隣の小・中学校や高等学校の教員及び今年度新たに研究主任となった教員など、63名が参観した(図11, 図12)。



図11 研究授業の様子(数学)



図12 研究授業の様子(理科)

授業は、前述のとおり、1年生の数学は、「データの分析と活用」の単元において、根拠と成り立つ事柄を示して理由を説明する力を高めることをねらいとして行われた。2年生の理科は、「電流の世界」の単元において、自らの言葉で筋道を立てて説明する力を高めることをねらいとして行われた(図13, 図14)。



図13 授業の様子



図14 授業の様子

事後研究会は、数学と理科の研究会にそれぞれ分かれて行った。研究会では、進行係が協議の進め方を説明した後、小グループごとに付箋を用いて協議を20分間程度行い、グループ代表者が発表し、山梨大学アドバイザーと本センター指導主事が指導・助言を行った(図15, 図16)。



図15 指導助言  
古屋 啓一教授



図16 指導助言  
中込 和彦教授

新研究主任をはじめ、外部からの参加者もあったため、討議が活発に進むように、生徒と教師それぞれの視点で成果と課題を分類していくスタイルの台紙を用意した(図17, 図18)。



図17 討議の様子



図18 発表の様子

校種・教科の垣根を越えて、教科のねらい及び授業観察の視点に沿って教科指導に関わる活発な意見が交わされた。拡大校内研究会後のOPPシートには、事前に生徒の学習課題を把握したことの

良さや授業目的を明確にすることの大切さが記述されていた。また、参加者から全国学調分析をもとに単元を設定した授業づくりが参考になったことや教材の扱い方の工夫やICT機器の活用の実践が参考になったという回答が複数あった。

以下は、OPPシートと参加者のアンケートの記述である。

#### OPPシートの記述より

- ・生徒の実態を把握したことが、授業づくりに生かされていると感じた。
- ・目的を明確にした授業づくりでは実物教材やICT機器を活用することが有効であると感じた。
- ・「個→全体→個」の流れで思考させることが説明する活動にとって有効だと感じた。

#### アンケートの記述(参加者)

- ・生徒の学習課題に学校全体で取り組んでいることが感じられる授業であることが授業者の説明やグループ協議からわかった。
- ・全国学調の問題を取り上げた授業づくりの実践が参考になった。
- ・教材の扱い方の工夫やICT機器の活用の実践が自分の授業づくりの参考になった。

#### イ 一宮南小学校 拡大校内研究会(国語)

拡大校内研究会では、3年生の国語の授業が行われた(図19)。教材となる作品の場面の移り変わりに着目し、それぞれの場면을説明する文を抜き出し、児童一人一人が想像した場면을説明し共有することを目的とした活動を行った。研究授業では授業者が、自校採点で明確になった語彙を増やすという課題解決に向けて子供たちの調べた言葉を教室に掲示するなどの工夫も取り入れていた。



図19 研究授業の様子

授業に合わせて、気持ちを表す語彙を獲得させるために、子供たちが調べた言葉をプラスの心情とマイナスの心情に分類して教室に掲示。

授業については、感染対策として教室の様子を体育館で参観する形(サテライト形式)をとった。研究会では、グループ協議を行い、学習活動の内容・成果・課題について、意見が交わされ、最終的に全体で共有した(図 20, 図 21)。



図 20 研究授業の様子



図 21 研究会の様子

また、山梨大学の齋藤知也教授より、全国学調と研究授業の関わりや研究授業と三角ロジックの関係について専門的な知見から指導助言をいただいた(図 22)。



図 22 指導助言  
齋藤知也教授

拡大校内研後のアンケートには、次のような記述が見られた。

**授業について**

- 子供たち一人一人がしっかりと意見を書いている、交流のなかでは多様な考えに気づける授業展開だった。
- 自分の考えを深めるためにどのような手立てで授業に取り組めばよいか様々な視点から学ぶことができた。
- 研究会で多くの先生方からの意見を聞き学びの多いものとなった。

**研修形態について**

- 現在の状況では、サテライト形式の授業参観がベストな方法なのかと思った。
- 実際に大勢の見知らぬ大人がいる中での授業だと児童たちの様子もいつもと異なるので画期的な方法であったと思う。
- モニターを複数用意してもらったが、よく聞き取れず細かな見取りができず残念だった。

授業の展開や児童の様子について、様々な意見をいただいた。参加者の先生方にとって学びある研

究会となった。研修の形態については、肯定的に捉える意見がある一方、「モニターを複数用意してもらったが、よく聞き取れず細かな見取りができず残念だった」など今後のサテライトやオンライン配信授業を行う上での課題についての意見も見られた。

**(3) アンケートと OPP シートの考察**

校内研究会における、教員の毎回の学びを蓄積するために、OPP シートを用意した。OPP シートは、A4用紙を横置きにし、3つ折りの両面印刷とした(図 23)。毎回の校内研究会終了後、全職員が

- 本日の校内研で一番大切だと思ったこと
  - 次回までに自分が取り組みたいこと
- をそれぞれ記述した。

図 23 OPPシート

両協力校の職員の変容をアンケートと OPP シートの記述から見取った。

2年間のセンター研究が、「授業改善に有効であったか」、「全国学調の分析が授業改善に有効であったか」についてアンケートを行い、以下のような結果が得られた。

ア 1月11日に実施したアンケート(図24, 25)

①センター研究は、授業改善に有効だったか。  
白根御勅使中学校 一宮南小学校

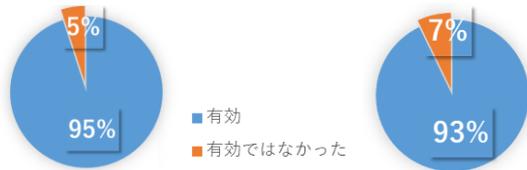


図24 アンケート①の結果

①の理由

- ・完全実施となった新しい学習指導要領をふまえた内容であったり、自分自身の教科指導力を高められるものであったり、自分自身に足りないと感じていた特別支援についての内容を学べたりするものであったから。
- ・教科に関する専門的な見方や授業で生かせる技術を教えていただいたので、指導の幅を広げることができました。また、本校の研究に寄り添っていただき、さまざまな方向から授業づくりに向けてご指導していただくことができた。
- ・グループ協議にも慣れたことで、個々の意見や疑問点を積極的に言えるようになり、全職員で課題を解決しようとするようになった。

両校とも9割以上の先生方から、センター研究が授業改善に有効であったという回答を得られた。教科に関する専門的な指導助言が効果的であったという記述も複数見られた。また、継続的にグループ協議を行うことで、全職員で課題を解決するようになったという記述が見られた。一方、小学校においては、国語と算数に特化した研究であったため、担任以外の先生方からは授業改善に生かすことが難しいという意見も見られた。

②全国学調の解答を分析することが、授業改善に有効だったか。

白根御勅使中学校 一宮南小学校



図25 アンケート②の結果

②の理由

- ・生徒がどう間違え、どう答えるのが正解だったのかを職員が理解することで、今後の授業において、御勅使中生徒の苦手な分野などの把握ができ、参考になった。
- ・課題の回答から見取れる児童の実態や授業改善の方法を学んだ。児童がどうしてこの間違いをしたのか、何が課題なのかという視点を日常的に持っていることが大切だと思った。授業では、重要事項を教えるだけでなく意味や関係性を考えさせ理解させることを心がけていきたい。

両校とも9割以上の先生方から、全国学調の解答の分析が授業改善に有効であったと回答を得られた。白根御勅使中学校では、自校採点をしたことで、生徒の実態を把握した上での授業改善をすることができたという記述が見られた。また、一宮南小学校では、WG協力校として山梨大学の齋藤知也先生や清水宏幸先生の詳細な分析が、授業の改善に生かされたという記述が複数見られた。一方、少数ではあるが全国学調の教科以外を担当する先生には授業改善に生かすことが難しいという意見も見られた。

イ 今年度のOPPシートの記述

- ・普段の試験の解答から生徒の理解の状況を把握することに取り組むようになった。
- ・生徒の実態をしっかりと把握して授業を計画するようになった。
- ・カリキュラムマネジメントの視点で、小学校・高等学校学習指導要領の内容を知ることが心掛けるようになった。
- ・特別支援教育に関する講義により、個々の生徒が抱える困難を正しく理解しようと生徒一人一人の様子を観察するようになった。
- ・校内研をきっかけに他の先生と教材研究など授業について意見を交わすようになった。
- ・学年を超えた児童の学習活動のつながりを考えるようになった。
- ・授業後に自分の活動を振り返ることを心掛けるようになった。
- ・具体的な授業づくりの手立てを知ることができた。

児童生徒の実態を踏まえた上で、手立てを講じながら授業を計画・実践するようになったという記述が多く見られた。また、学年間や校種間のつながりを考えて授業を構成するようになったという記述も見られた。

#### ウ 1年目と2年目のOPPシートの記述

個人の中で、どのような変容があったのかについて見ていきたい。以下の記述は、同一の先生の1年目と2年目の「次回までに取り組みたいこと」の記述である。

##### 研究協力校1年目の記述

- ・教材研究、効果的な学習課題の作成
- ・発表の仕方を指導していきたい。
- ・小グループ活動を積極的に行う。
- ・授業において話し合い活動を定期的に行いたい。より効果的にグループ活動が進められるような支援方法を考えていきたい。
- ・学級における具体的な手立てを考えて、要支援生徒に声かけを行い、自己肯定感を高めたい。
- ・生徒の考えをくつがえすような効果的な学習課題を開発し、授業において小グループ活動を取り入れ、生徒に学習することのよさに気づかせ、学ぶことの必然性を持たせたい。

##### 研究協力校2年目の記述

- ・多様な評価方法を授業に取り入れ、授業前後にやってみて、生徒の評価及び私自身の授業改善にもつなげたい。コンセプトマップを使う。
- ・課題解決型の学習が重要な意味を占めている。展開の中には課題に対して予想、分析、実験、結果を受けての考察があり、これらを計画的に取り入れることで、表現力、思考力、判断力を伸ばしたい。
- ・基礎基本の定着を今後も大切にしていくことが、学習したことを活用できる力を日頃の授業を通して育成できるような授業づくりを行っていきたい。
- ・単元を終えた後に再度学習事後調査を行い、授業を通してどのように変容したかを調べ、定着していない部分については再度指導したい。

1年目は、授業改善に向けて意識の高まりは見られるが、具体性に欠ける記述が多い。対して2年目は、下線部からわかるように、授業改善に向けてのより具体的な方策の記述が見られる。

#### V 研究の成果と課題

##### (1) 研究の成果として

###### ア アンケートの結果から

- ・教科に関する専門的な指導助言が、先生方の授業改善に効果的であった。
- ・自校採点講習会における全国学調の解答の分析が生徒の実態を把握した上での授業改善に有効であった。また、WGの先生方による専門的な分析により、授業改善の方策が明確になった。
- ・校内研究会においてグループ協議の機会を多く体験したことで、個々の意見や疑問点を積極的に発信できるようになり、全職員で課題を解決しようという姿勢が育まれた。
- ・全国学調の自校採点から示唆された学習課題を解決させることを目的とすることで、具体的な授業改善に取り組むことができた。

###### イ OPPシートの記述から

- ・校内研究の目的を明確にすることで、先生方の研究に対する意識が改革された。
- ・授業づくりに向けた学校の取り組みを通して児童生徒の学習状況の課題を全職員が把握することができた。

##### (2) 研究の課題として

- ・具体的な授業改善に向けてのイメージができない先生に対して、支援を行う必要がある。
- ・OPPシートの先生方の記述に対して、センター指導主事が必要に応じた助言を十分に行う必要がある。
- ・授業改善の成果を具体的に得るための方策を明確にする。
- ・全国学調の教科以外での授業改善の在り方について考えていく必要がある。

### (3) 来年度に向けて

- ・来年度も研究協力校とより一層共通理解を図り、校内研究の支援を進めていく。
- ・自校の全国学調の結果分析を校内研究会の学習会として、1学期中に設けることを提案し、以降の授業研究に生かしていけるようにする。
- ・本センターのシンクタンク機能を生かし、研究協力校が研究したい内容に沿った学習会等の提案をする。
- ・OPPシートの活用を形骸化させず、全体で振り返る中で、教員の授業改善をより具体化する。

### おわりに

中学校チームでは、2年間の研究の中で協力校の先生方に研究に対する取り組みを通して、目的を明確にして授業づくりを行うことの意義を伝えてきた。校内研究の支援としては不十分なこともあったが、授業づくりを具体的にに行った取り組みの過程において児童生徒の実態把握について力になれたと考えている。また、今回の研究を生かし、授業改善を意識した授業づくりの支援を行ってきたい。

### 【研究協力校】

南アルプス市立白根御勅使中学校

校長 清水 英樹

笛吹市立一宮南小学校

校長 横谷 潤一

### 【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 中込 和彦

山梨大学 教授 古屋 啓一

### 【山梨大学データ分析WGメンバー】

山梨大学 教授 田中 勝

山梨大学 特任教授 青柳 達也

山梨大学 教授 田中 武夫

山梨大学 教授 齋藤 知也

山梨大学 教授 清水 宏幸

山梨大学 准教授 安藤 大輔

山梨大学 准教授 山際 基

### 【総合教育センター研究アドバイザー】

教育研究推進幹 田沢 憲

主幹・指導主事 廣瀬 志保